猿新聞

編集・発行者
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

次世代につなぐ 獣害のない里

近年、中山間地域からの若者の都市への流失が加速しています。

中山間地域では過疎化、高齢化の進行が著しく、加えて、野生鳥獣の被害増加により耕作放棄地や荒廃林増加などが原因で集落の機能維持が限界に達しつつあります。

山地の多い日本では、中山間地域は国土面積の73％。農業産出額は35％と、日本農業の中で重要な位置を占めています。

このまま人口流失が進めば、中山間地域が担ってきた生物多様性、水資源の「かん養」など、国土保全に直結する重大な機能が働かなくなる恐れも否定はできません。

中山間地域の疲弊は鳥獣害が原因といっても過言ではないと思います。

次世代に、魅力ある中山間地域をつなぐには、鳥獣害のない地域作りが不可欠です。

動物と人間の長い共生の関係を壊してきたのが私たちであるとすれば、それを元に戻すのも、また私たちの責任です。

人間の活動域と野生動物の生息域が重複している現在、駆除や侵入防止柵の設置など従来の方法では、根本的な解決にはなりません。すみ分けで共存を図る転換期にきていると考えます。

昔は、人間の活動域と野生動物の生息域の間には里山という緩衝地帯がありすみ分けが成り立っていて大きな不和もなく共存していたのです。

中山間地域の近代化と過疎化の中で里山は荒廃し、緩衝地帯としての機能をなくしてしまったことが、獣害多発の原因といわれています。

今後、里山の復活を図るとともに、過密した人工林を間伐し、林床に光を採り入れ、林内に実のなる広葉樹が定着できる環境を再生し、野生動物の生活の場となる森林を構築し、棲み分けを図ることが急務だと考えます。

その昔、先人達が害獣と闘ってきた証に、全国各地に現存する「ししがき」があります。

今の私たちから見れば、攻め寄せてくる獣を防ぐためのものに思えますが、その規模の長大さから見て先人たちは、すでに棲み分けの手段を模索していたと考えられます。

よりよい環境を次世代につなぐために先人たちは、重機のない時代に大きな石を採取・運搬し、積み上げて忍耐と努力で長大な「ししがき」構築したのです。

先人たちの血のにじむ努力と、知恵や団結力に学ぶことが多々あります。

現代に生きる私たちは、次世代の若者が安心して農業に参入できる環境づくり、加えて、高齢者や女性などが、安心して野菜づくりができる環境を取り戻さなければなりません。地域作りの究極の目的は、「ここに住んでいて良かった」と思える、地域を次世代へつなぐことにあります。

米を食べるスズメ
たが、害虫も食べてます

田んぼ一面が緑色から黄金色に変わっていく頃は、農家にとって最もうれしい季節です。

だが、この頃から人間とスズメとの虚々実々の戦いが始まり、イノシシ、シカ、サルに加えてスズメと、文字通りの鳥獣害の季節を迎えます。

稲の乳熟から硬熟までのわずかな期間ですが、昔からスズメとの戦いは続いていますが、スズメもさる者、現代に至ってもこれといった決め手がないというのが実情で、特に近頃では、獣害対策に手を取られスズメまで手が回らないのが現状です。

東海農政局よる鳥獣別にみた被害金額の割合は、三重県が平成25年度額3億2千万円。獣類によるものが78％。鳥類によるものが22％。鳥類ではカラスによる被害が13％。次いでスズメが3％。ヒヨドリが2％。など。

早生種で周りの水田より早く出穂した場合には集中して被害を受けることがあります。田植え時期を調整して周りの水田が一斉に出穂するようにすれば、被害は分散し軽減できるように思います。

多種多様のスズメ撃退グッズが市販されていますが一長一短があり大きな効果が得られていないのが実情です。防鳥ネットは、効果がありますが、設置作業が困難です。

近年、被害面積、被害量ともに減少傾向にあるといわれています。

要因は、今のところハッキリしないようですが、個体数の減少が先ず頭に浮かびます。

スズメは、米を食べる以上に害虫を食べているそうで、個体数の減少は農家にとって両手を挙げて喜べることではありません。痛しかゆしです。

スズメの減少分害虫が増えて米の質が落ちたり、農薬を多く使わなければならなくなるかも？。

「スズメなんかに一粒もやらん！」ではなく互いに痛み分け程度で折り合いをつけ、共存を図るべきではないでしょうか。

イノシシ被害
狙われる稲の乳熟期

イノシシの被害は、農家にとって深刻な問題です。

イノシシの被害は一年中ありますが、特にこれから秋にかけての時期は、サツマイモ、カボチャ、水稲などの収穫期を迎え、1年中で最も被害が多くなる時期なので早めの対策が肝心です。被害が発生してからの対応では手遅れです。

運動能力と柵作り。

イノシシは1メートル以上の高さを助走もなしに飛び越えることができるそうです。子供イノシシでもトタン板より高い70㌢を飛び越える個体も。イノシシはくぐり抜けるのも得意で、多少でも柔軟性がある場合、20㌢の隙間があれば成獣でも地面を掘らずに通り抜けることができます。鼻の力も非常に強く、70㌔の石でも簡単に動かすことができます。

トタン板などによって視覚を遮る柵が最も効果があり、昔から使われています。（柵内にある餌を見えなくする）しかし、高さが1㍍程度までは飛び越えることできるので1㍍以上の高さを確保することがポイントです。

網の柵でも一定の効果があります。しかし、網柵は中がまる見えですので、網を壊してでも侵入しようとしますので、ワイヤーメッシュなどの丈夫な網柵を用いいることが必要です。

柵は高さの確保もだいじですが、対イノシシ柵は接地面を掘り返されないよう強力に固定することがだいじなことです。

畦畔の掘り返し

近頃、イノシシによる畦畔や溜池の法面、道路の法面、水路等の構造物の「掘越し被害」が、山間部のみならず比較的平坦な所にまで及んでいます。農作物も痛手ですが、構造物の破壊は金銭的にも一段と大きなダメージとなります。

冬期の畦畔・法面に繁茂する緑草がシカやイノシシの農地依存度を高めています。10月下旬以後に刈り取ることで雑草の繁茂が抑えられ、冬場の餌場価値を低減できるといわれています。

また、イノシシはミミズなど地中の生き物が好物です。ミミズなど発生させない畦畔管理が必要です。

苅り払った草を放置しておくとミミズなどが繁殖する原因になります。

苅り払った草は持ち出すか、焼却するようにしましょう。

ヒガンバナやチガヤを畦畔に植栽して効果をあげている地域もあります。

ヒガンバナは球根などに毒性があるため野生動物が避けるといわれています。イノシシは、道路の法面や溜め池の堤防に自生しているクズ根が大好物で、その掘り起こしが法面の崩壊や堤防の決壊につながる恐れがあり、早急に手立てを講じる必要があります。クズ根には、「抑草剤」散布が効果があるようです。「抑草剤」は、４０～５０日間、雑草の草丈の伸びを抑えるので、草刈り回数も減らせます。

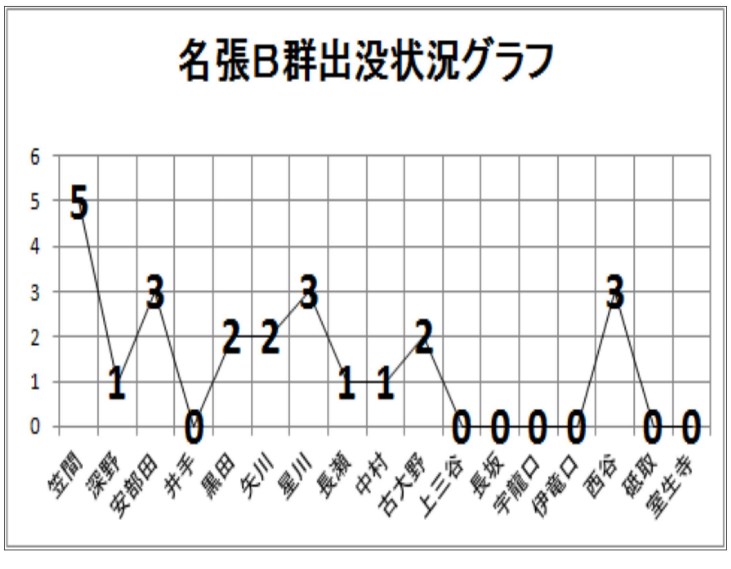
なにはともあれ、日頃からイノシシを寄せつけない環境整備が必要です。

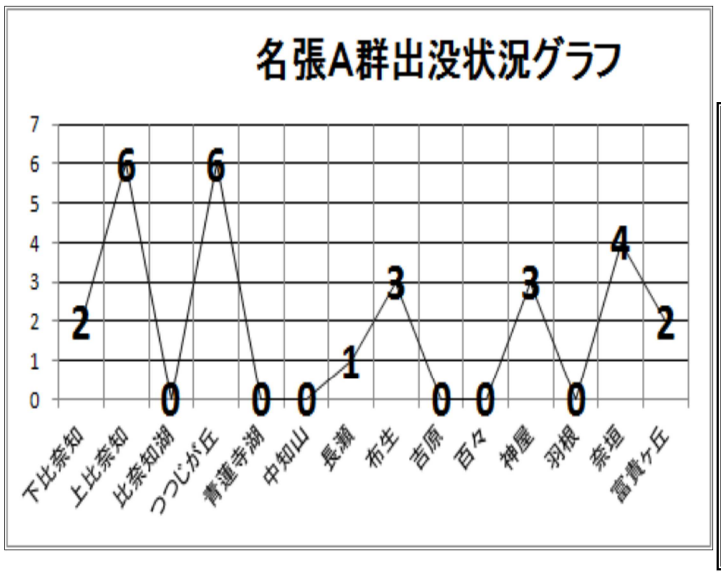
イノシシは開けた場所を嫌います。山際の草刈りや間伐などを実施して、見通しを良くして近寄りにくい環境作りがだいじです。

耕作放棄地をなくしましょう。耕作放棄地は「ヌタ場」となり快適なエリアとなります。

イノシシの個体数を、適正に管理することも必要で大事なことです。

サルの出没状況
名張A・B群





指南員報告

A群は、先月に引き続き集落内の畑作物を中心に採食しており、各地で被害が出ています。

特に比奈地地区での滞留が長く、被害も顕著です。

B群は、国道165号線の北側を中心に各地を遊動しています。未熟のカキやクリを採食している模様です。また、先月上笠間へ遊動域を広げたことを報告しましたが、今月それを超えて下笠間まで遊動域を広げたのは、特筆すべきことです。